

## 廃墟の人類学

### ～廃墟の「場」としての意義を探る～

北澤剛

キーワード：廃墟、観光、歴史的建造物、ノスタルジア

本研究は、筆者が使われなくなった建造物、いわゆる「廃墟」に対して魅力を感じているという特徴的な性格を生かして、「廃墟」が場としてどのような意味を持ち人間と関わっているのか、そして建造物を後世に残すことの意義について、廃墟という存在自体をフィールドとして、記憶の場やトポフィリアなどという概念から検討を行う。

まず、本論文は10章構成である。

第1章では本研究の動機や目的、論文の構成について述べる。

第2章では、事前調査として、始めに「廃墟」や「遺構」の意味について定義し、本研究で対象として取り扱うフィールドである北海道夕張市のカフェ、北海道開拓の村、北海道別海町の交通遺産、洞爺湖有珠山ジオパークの災害遺構群についての基本的な情報について説明する。

第3章では、先行研究のレビューを行う。廃墟については様々な学問分野からアプローチがなされている。第1節では廃墟の魅力が時間軸とどのように関わっているかについての研究、第2節では廃墟がどのような定義の中で存在するのかについての研究を紹介する。第3節、第4節では廃墟が一種のコンテンツとして取り扱われるようになってきた情勢を考察する研究を紹介する。そして第5節では、本論における理論的枠組みの先行研究として、トゥアンの「トポフィリア」概念を用いて、廃墟と人間の関係性についてトゥアンの問題点を明らかにし、それを克服できる可能性のあるノラの「記憶の場」概念について説明する。その後、第4章ではこれらの概念を踏まえて、本研究の位置づけと独自性について説明する。

第5章では、本研究における調査概要や調査協力者、倫理・安全上の注意事項について述べる。

第6章では、夕張市の廃駅を利用したカフェと別海町の交通遺産の例を用いながら、かつて使われていた建造物を遺産として後世へ伝えていくことが、どのような重要性を持つのかについて、「記憶」に着目しながら述べる。

第7章では自らが所属する「廃墟マニア」コミュニティでの調査を通して、廃墟を好む

人々がどのような背景や価値観と共に、それぞれについて比較しながら考察を述べる。

第8章では、北海道開拓の村と洞爺湖有珠山ジオパーク災害遺構群という、「観光地」へと変化した遺構について、フィールドワークとインタビュー調査を通して、遺構が地域やその人々とどのように関わってきたのかについて説明する。

第9章では、廃墟が「場」としてどのような意義を持っているのかについて、前章までの調査の結果を考察しながら、理論的枠組みを用いて説明し、廃墟という建造物が時間軸に置いてどのような位置に存在するのかのイメージを図式化して示す。

第10章では、第5～9章を整理したうえで研究設問に答え、今後の課題について述べる。ある特定の建築物は、時間が経ってもその当時の「記憶」を持つ人々によって、その存在が重要なものになる。また、廃墟に魅力を感じる人々は「過去を想い」「他者の記憶をたどること」という行為自体に魅力を感じていることが明らかになった。ノラの「記憶の場」の概念に合致するものと言えるだろう。しかし、そこに付随した記憶は必ずしもプラスに働くとは限らないことも調査で明らかになる。「廃墟」は様々な人々の営みの交差点で、記憶がこびりついた異質な場所であると言える。

スクラップ&ビルドの加速する現代社会では、新しいコンテンツが生まれては消えることを繰り返している。古く使われなくなったコンテンツは、新しいコンテンツの踏み台にされてしまう。このような時代の波に取り残されてしまった廃墟や遺構を保存することは、ただ建築物を修復し、守ることではない。時間と時間の狭間に存在する「何者でもないもの」をその場に留めることで、それらを取り巻く人々の「記憶」を後世に残し、語り継いでいくことなのである。